

「笑顔で働き続けられる職場」を目指して 働きやすい職場環境の整備を進める

成田空港における航空貨物輸送では、貨物が国内配送用のトラックに積み込まれるまでにドライバーが長時間の待機を強いられており、荷待ち時間の縮減が求められている。千葉県成田市に本社営業所を構え、航空貨物輸送などを手がけている(株)共和通商（龍崎信吾代表取締役）では、積込と配送の分業制によるドライバーの時間外労働削減を進めてきた。同社では今後も引き続き、同社で働く従業員にとって、働きやすい環境の整備に力を注ぐ。



同社のトラックの前に立つ、龍崎信吾代表取締役（右）と龍崎正和常務取締役（左）

■荷待ち時間が長い航空貨物輸送 協議会での議論通じて効果の高い対策を

(株)共和通商は、龍崎信吾社長の父親である先代社長によって平成5年に設立された運送会社である。設立当初は保有台数7台で、コンビニエンスストアの物流センターへの菓子配送を主体としていたが、今から20年ほど前から航空貨物輸送を手がけるようになり、現在では輸送量の3分の1ほどを占めている。航空貨物輸送では、パソコンやスマートフォン、半導体、自動車部品、雑貨、自動車、美術品など多種多様な荷物を輸送している。また、その他にも同社では食品のルート配送や医薬品などの輸送も手がけている。さらに、同社では業容の拡大に伴い、21年以降県内外に営業所を開設しており、現在は栃木（栃木県小山市）、石川（石川県能美市）、名古屋（愛知県常滑市）、関空（大阪府泉佐野市）のほか、関連会社である(株)共和トランスポートが八千代センター（千葉県八千代市）と久喜センター（埼玉県久喜市）を設置している。そして、29年には成田空港南部 LC 冷蔵倉庫と成田空港 LC 冷蔵倉庫を開業。車両の増車や車種の多様化、装備機器の近代化を積極的に進めてきた。なお、昨年には設立30周年を迎えている。

安全面での取り組みでは、「安全は家族と、会社と、社会の願い」をモットーと位置づけて、事故防止対策を強化。21年にデジタルタコグラフを、27年にはドライブレコーダーを全車両に装着している。また、ドライバーへの教育指導に際しては、毎日の点呼の機会を有効的に活用。管理者とドライバーがコミュニケーションを取りながら、「こういうところが危ない」と具体的に例示し、気付きを促すようにしているという。

同社では石川県にも営業所を構えていることから、冬には積雪路面を走行する機会も多い。そこで、同社では新人ドライバー向けに、チェーン装着に関する研修を実施。練習を重ねることで、早期習熟に繋げている。また、荷物の固縛方法やパワーゲートの使用方法なども訓練を行い、輸送中における荷物の破損トラブル

防止を図っている。

同社では現在、営業所ごとに求人募集を実施している。この春には、栃木営業所に22歳の女性が入社。栃木から成田に引っ越しをしたうえで、現在は本社営業所で添乗指導を受けながら、ひとり立ちに向けて技量を磨いているという。

同社では本社営業所の近くに寮を構えており、彼女もその寮で生活をしているという。求人募集の際にも「社員寮完備」とアピールをしており、14部屋ある社員寮は現在満室になっているという。

「地方には職を求める人が多い一方、その受け皿となる事業者がそれほど多くありません。寮完備であることをアピールすることで、全国からドライバーを採用することが可能となります」（龍崎正和常務取締役）

人材獲得を図る一方で、現在同社で働いているドライバーの職場満足度を高めていくことができなければ、離職者が多く発生し、会社の事業運営は成り立たなくなってしまう。同社では、「物流の2024年問題」に直面している中でもドライバーの手取り給与が減ることのないように給与制度の見直しを行ったほか、旅行プレゼントを行うなど、福利厚生の実装も進めている。

さて、航空貨物輸送において現在大きな問題になっているのが、空港内での荷待ち時間が長いことである。海外から成田空港に到着した航空貨物は、「上屋」と呼ばれる荷さばき場に運ばれ、航空貨物代理店などのフォワーダーや通関業者が荷降ろしや通関業務、梱包などを実施。その後、航空貨物はトラックに積み込まれて、国内各地に運ばれていく。同社の場合、空港内での集荷の回数にもよるものの、トラックへの積み込みまでの間に6時間かかることもあるという。



龍崎 正和
常務取締役



毎日の点呼では、管理者とドライバーがコミュニケーションを取りながら事故防止を図っている



「働いている従業員が笑顔で働ける職場」を目指し、従業員とのコミュニケーションを大事にしている



同社は昨年設立 30 周年を迎え、記念祝賀会を大々的に開催した

「コロナ禍の際に上屋の運営スタッフが多く離職してしまい、現在では空港全体が人手不足の状況になっています。荷待ち時間の削減については、運送事業者だけでコントロールできる問題ではなく、航空貨物に関係する業者みんなで足並みを揃えて、効率的な仕組みを考えて推進していく必要があるのではないかと考えています」(同)

こうした中で千葉県トラック協会では、フォワーダーや通関業者、上屋事業者、空港会社とともに「2024 年問題対策協議会」を発足させ、空港内での課題や問題の解決策について検討を進めている。

「航空貨物を利用している荷主は、輸送を急いでいるからこそ航空貨物を使っているという側面があり、荷主のニーズに応えるためには、スムーズな荷扱いが喫緊の課題になっています。成田空港は、全国の空港の中で最大の貨物取扱量を誇っています。協議会の委員の皆様には、よく実態を見ていただいた上で、効果の高い対策を策定していただきたいと思います」(同)

なお、同社では長時間待機に伴うドライバーの負担軽減を図るため、15 年ほど前から配送に当たるドライバーとは別にトラックへの積み込みに当たる作業員を充てるようにしており、積込と配送を分業制にしたことで時間外労働の削減に繋がっている。

同社では現在、よりよい労働環境の実現に向けた取り組みを進めている。なかでも力を入れているのが DX (デジタルトランスフォーメーション) に関する取り組みである。同社では動態管理システムを導入し、配送・作業スケジュールの効率化を進めているほか、本社営業所内に屋内大型モニターを導入し、各営業所の映像を常時確認できるようにしている。また、一般的に事務所経費がブラックボックスになりがちであることから、経理業務の DX 化にも取り組んでいきたいとしている。

また、同社では 4 年ほど前から、地元小・中学校で職業体験を行っている。生徒たちに同社のトラックなどを見てもらいながら、運送業界の果たす役割やその魅力を説明していくことで、自分たち

の住む地域にこんな会社があるということ気付いてもらうとともに、将来的にはトラック運送業界で働いてもらえればという期待も込めているという。

さらに、同社従業員が本社営業所周辺で美化運動などを行うなど、地域に根差した運送会社としても取り組みを進めている。

さて、同社を率いる龍崎信吾社長 (50 歳) と正和常務 (42 歳) は兄弟であり、二人とも高等学校を卒業し、2 年ほど成田空港内で働いたのち、信吾社長は 8 年に、また正和常務は 14 年に同社に入社した。初代社長として奮闘する父親の姿を間近に見てきたこともあって、父親から受けた影響は非常に大きく、二人とも子どもの頃から「いつかはこの会社に入って、父親とともに運送の仕事に就く」と思っていたという。正和氏は、入社後 2 年間はドライバーとして勤務し、その後積込み作業員として仕事に就いていた。

正和常務が同社に入社して 5 年後、先代社長が病魔に冒され、1 年ほどの闘病の末、20 年に他界。先代社長の後を継いで、信吾氏が社長に就任した。なお、正和氏は今から 4 年前に常務に就任し、兄弟二人で同社の経営に当たっている。

正和常務に、同社における今後の取り組みについて伺うと、「当社で働いている従業員が笑顔で働くことのできる環境づくりを進めていきたいという。

「安全・安心な輸送を続け、当社の持続性を高めていくために、最も大切にならなければならないのは、物流の現場で日々働いている当社の従業員たちではないでしょうか。引き続き、従業員とのコミュニケーションを大事にしながら、従業員にとって働きやすい職場環境づくりを続けていく必要があると感じています。それとともに、当社が永続的に事業を展開していくためには、当社が『地域から必要とされる企業』であり続けることも重要です。様々な形で地域支援を通じ、当社をより地域に根差した企業にしていきたいと考えています」(同)

ホットにゅーす

■各地の神社に足繁く参拝 パワースポットで気力をチャージ!

正和常務の趣味はパワースポット巡りである。時には一人で、またある時には同好の仲間たちとともに、日本寺 (鋸南町) や鶴谷八幡宮 (館山市)、安房神社 (同) など県内の神社を始め、各地の神社を参拝して運気を高めているという。

「古来からの自然を敬い、感謝の気持ちを持ちながら、パワースポットに訪れています。歴史ある場所からエネルギーをいただくことで、仕事に対する気力も一段と増してきます」(同)



休みの日には、各地の神社などのパワースポットを巡っている正和常務

企業プロフィール 株式会社共和通商

代表取締役 龍崎 信吾
本社 千葉県成田市小菅字細田 1381-24
従業員 300 人(うちドライバー 139 人)
台数 131 台